

読書館



社会を変えるには

小熊英二著

現代日本の病理えぐる



(講談社現代新書・1365円)

おくま・えいじ 1962年生まれ。慶應義塾大学総合政策学部教授。

ある意味、「不親切」で「読み難い」本である。五百頁の新書は一般読者にとって耐え難い長さであろうし、政治学や社会学の知識がなければ投げ出してしまふかもしれない。著者の見解は少なく、どこかで聞いたような議論が多いので冗長にすら感じられる。だが、これらは本書の価値を損なうものではない。筆者は驚くべき幅広い問題意識を持ち、重厚な知見を総動員して現代日本の病理を抉り出している。

一章は戦後日本論、二章・三章は社会運動論、四章・五章はデモクラシー論や自由民主主義論を展開。六章では近代社会の様態が掘り下げられ、七章で「社会を変えるには」という本書の主旨が導かれている。

本書は、現在の日本の姿を映しているとはいえるだろう。工業化社会から脱工業化社会への社会変動、冷戦構造の瓦解とバブル崩壊、非正規雇用といった労働問題が噴出する中で、戦後日本を支えてきた多くの価値観が揺らいでいる。そして、そうした古い戦後日本の象徴が「原発」である。原発を取り巻く社会構造を考えることは、私たち自身がその「都合な真実」と正対することに等しい。本書の「読み難さ」はその作業がはらむシレンマを示している。

「原発デモで社会は変わったか」。誰もが抱く疑問であろう。著者は、誰でも参加できるデモを「社交の場」として捉え、直接民主主義によって代議制民主主義を「補完」することを強調する。この論調はいまや一つの流行である。インターネットやツイッターで人々が集まり「紫陽花革命」という造語も生まれた。参加者が自発的に集まってくる運動を小さな花が集まった「紫陽花」にたとえたのである。しかし、ツイッターやデモは、人々が既に持っている共感や絆を強めてはくれるが、理性的な討論には向いていないのではないだろうか。「仲間」を作るには適しているが、「他者」と対話するのには向いていないのではないか。問題は社会を「どう変えるのか」を理性的に議論することである。

(九州大准教授・政治学 大賀哲)